



「声」の欄・投稿規定

★「声」の欄は読者の皆さんのお考えを、直接誌面に反映させるためのページです。皮膚病の診療に関する日ごろのご意見、新しいアイデア、ご提言などをお気軽に寄ってください。とくに日夜第一線で診療に活躍しておられる先生方からのご投稿を切望します。

★「声」の欄には、また皮膚病に関する“質疑応答”を取り上げます。お寄せいただいたご質問は、その方面の権威に依頼して適切な回答を用意し、誌上で発表いたします。とくに回答者を指名されても結構です。

★字数は一般のご投稿は1,200字以内、質問は600字以内を原則とします。

★ご投稿は郵送のほか、FAX（番号：03-6838-9222）とE-mail（アドレス：hifubyoh-shinryoh@kk-kyowa.co.jp）にても受け付けております。

★原稿には住所・氏名を明記していただきます。

スポーツ選手にみる皮膚疾患との関わり合い

私の診療圏である西三河、尾張東部は自動車産業が盛んで、昨今は実業団スポーツ選手の病気と関わる機会が増えてきた。一般的な治療から競技者の生活環境までを考えて原因物質を特定するなど、皮膚疾患の診断、治療を行っている。

先日やはり企業のヨット選手が来院したが、セーリングの際のゾエア（海中に漂う孵化した甲殻類の卵）による海水浴皮膚炎であった。東京オリンピックの競技種目であるサーフィンの選手では、ウェットスーツのゴムによる皮膚炎や、汗による紅色汗疹もみられる。もちろん整形外科での治療中にみられるゴム製品、消炎効果を求める器具による皮膚疾患も多い。

さらに選手特有の治療法の注意として、ドーピング問題に関心を払う必要が出て来た。2016年のリオ五輪の場外は“より速く、より高く、より美しく”を追求するための禁止薬剤使用に揺れた。わが国のトップアスリートたちも、多岐にわたる皮膚疾患で受診してくる。そのため、診察時にたえず治療に使用する薬剤とドーピングについて検討している。詳細は異なるが、基本的には選手として活動している全員に目を配らねばならない。そして日本体育協会作成の『ドーピング防止ガイドブック2015年版』を参照し、選手に投与薬品の説明や協会向けの指示箋の作成などを行っている。前回のパラリンピックでは、重症アトピー性皮膚

炎に一時的にステロイド内服を使用し、経過を委員会に報告した。

他方、近くには子供たちのレスリングの教室、隣接する大府市には世界的なレスリング選手を輩出する大学等がある。このため、柔道やレスリングの選手も頭部、顔面の皮疹で来院する。レスリング選手の *T. tonsurans* 感染にふれると、海外遠征後の選手に海外でみられる原因菌による感染が広がったことが、2003年ごろから日本皮膚科学会で問題となった。順天堂大学では柔道連盟と共同で感染患者の診断と防止対策を行っているが、レスリング選手への対策が遅れている状況があった。2011年には後頭部の脱毛と Black dot ringworm を有するレスリング関係者が来院し、頭部白癬と診断した。その際に、順天堂大学作成の *T. tonsurans* についての冊子を日本レスリング協会の関係者にも渡し、白癬治療に対する啓発を依頼した。この結果、協会主催の大会に参加する選手の身体検査が行われるようになった。

2016年には、2棟で合宿生活を行っている学生選手の24人中13人が来院した。女子学生でお互いに外用剤を塗布、漫然と抗生剤を服用していた症例があり、さらに皮膚からの細菌培養の結果、多剤耐性MRSAが検出された後に再び真菌感染をみた症例もあった。共同生活の感染対策として速やかな検査とともに、とくに的確な抗生剤、抗真菌剤の使用にも注意を払うことが重要課題となった。

清水正之

（三重大学名誉教授／刈谷市・清水皮膚科クリニック）